

ヒューム『人性論』分析：「同一性」について

2020年5月24日 宮国淳

<http://miya.aki.gs/mblog/>

※ 引用される場合は、出典を明記して
くださるようお願いいたします。

本稿は、ヒューム著、土岐邦夫・小西嘉四郎訳『人性論』（中央公論社）における「同一性」に関する分析である。

ヒュームは同一性も「知覚」であると説明しているにもかかわらず、一方で「万物は流転する」のような哲学的常識に縛られ、印象は常に変化・消失し、同じものは現れないという“思い込み”を取り払えないまま同一性について説明しようとして袋小路に入り込んでいるようだ。

しかし、私たちが「同じだ」と思うのは、ただ“端的に”そう思うのであって、「違う」「変化した」と“端的に”思うのと同じことなのである。私たちがどう見ても「同じだ」と思うとき、そこに「相違」を見出せないとき、そこに「変化」「相違」があるといかに証明するのであろうか？

本文中で詳細に論じるが、「相違」「変化」を承認しようとするのであれば、「同一性」も同じように承認すべきなのである。「同一性」を根拠づける必要があると言うのであれば、同様に「相違」「変化」も根拠づける必要があるのだ。しかし私が知る限り、哲学者たちは「相違」「変化」「差異」は根拠なしに承認しているのに、「同一性」だけに根拠づけを求めようとする（場合によっては根拠がないと主張したりする）。

ヒュームだけでなく多くの哲学者たちが同一性について上手く説明できないのは、一方の事実（具体的経験）のみを採用し、他の事実を無視しているためではないかと思われるのだ。まさに次のジェイムズの言葉のとおりである。

経験論が根本的であるためには、その理論的構成において、直接に経験されないいかなる要素も認めてはならず、また、直接に経験されるいかなる要素も排除してはならない。（W.ジェイムズ著・伊藤邦武編訳『純粹経験の哲学』岩波文庫、49ページ）

最後の二章では「人格の同一性」についても論じている。ヒュームが「記憶」に着眼したのは非常に的確であると思う。しかし「同一性」に関するヒュームの不正確な認識がその理論を歪めているので、それらの問題点について指摘しておいた。

私はこれまで『人性論』に関する以下のレポートを作成しているので、参考にしていただければ幸いです。

ヒューム『人性論』分析：「関係」について

http://miya.aki.gs/miya/miya_report21.pdf

(抽象観念および言葉の意味、時間・空間、複雑観念、因果関係)

ヒューム『人性論』分析：記憶と想像の違いとは？

http://miya.aki.gs/miya/miya_report27.pdf

(記憶と想像との違い)

ヒューム『人性論』分析：「信念」について

http://miya.aki.gs/miya/miya_report28.pdf

(信念について)

なお、本稿における引用部分は上記の『純粹経験の哲学』のもの以外は、すべて『人性論』からのものである。

<目次> ※ () 内はページ

I. 「同一性」とは「知覚」、所与として現れる経験 (3 ページ)

II. 「同じ」ことを疑うのであれば「違う」ことも疑わなければならない (4 ページ)

III. 「同じ」にもいろいろある (7 ページ)

IV. 「人格の同一性」は記憶による (9 ページ)

V. 「自己」「人格」という“実体”はない (11 ページ)

<追記> (12 ページ)

I. 「同一性」とは「知覚」、所与として現れる経験

ヒュームは「七つの哲学的関係」について次のように分類している。

観念に依存せず、観念が同じままでも、あつたりなかつたりするほかの三つの関係については、当然、もっと特に詳しく説明しなければなるまい。この三つの関係というのは、同一、時間的および場所的状态、そして因果性である。(ヒューム、42 ページ)

・・・一方、「類似、反対、質の度合い、量もしくは数の割合」(ヒューム、40～41 ページ) は、

観念のみに依存し、知識、すなわち確実性の対象となりうる(ヒューム、39 ページ)

一目で見いだせるようなものであり、論証の領域よりはむしろ直観の領域に入れるほうがふさわしい(ヒューム、40 ページ)

・・・として、同一、時間・場所、因果性と異質なものであると区別している。しかし後でヒューム自身が、

しかしあらためて考えてみると、数の計算も、ほかのどの推論と同じように、それ自体の性格を弱めて、知識から蓋然性へ退化せざるを得ないように思える。(ヒューム、89 ページ)

・・・と述べているように、ヒュームの主張は一貫してはいない。

実際のところ、類似や反対が「観念」のみで完結するはずがないではないか。そこに実際に見えているものが似ているのかどうかなど、そのものを見て判断しているだけである。そこに「観念」というものが入り込んでいるであろうか？ ただ端的に“似ている”と思うだけである。そして、それは同一性も同じではなかろうか。

もちろん、そこにはない二つのものを想像して似ているか判断するような場合、それはもちろん「観念」どうしの比較ではあるが(これはヒュームの論点からずれる話であるが)。

つまり類似や同一性を「確実性」「知識」という次元で区分しようとしたヒュームの論点に問題があるように思うのだ。

ヒュームは同一性(そして時間・場所)の関係について、

対象がともに感覚機能に現れていて、同時に関係もそこに示されているときには、これを推論と呼ぶよりはむしろ知覚と呼ぶ。この場合には、思考は少しも働かず、もっと正しく言うと、いかなる能動的な作用もなく、ただ感覚器官を通じて印象を受動的に受け容れるだけである。したがって、この考え方によると、同一、および時間や場所の関係についてどんな観察をしようと、これを推論として受け取ってはならないのである。(ヒューム、42 ページ)

・・・と説明している。ここでヒュームは同一を「推論と呼ぶよりはむしろ知覚と呼ぶ」としている。つまり推論の余地なく、実際の具体的経験として「同じだ」と“端的に”判断した事実がある、つまり同一性とは所与の経験として現れるものだ、ということなのだ。

同様に類似も所与の経験として、端的に“似ている”と思うだけなのである。それは印象と観念の区分とは関係なく、印象どうし、観念どうし、印象と観念との間で比較され、それらが“端的に”「同じだ」あるいは「似ている」、さらには「違う」と判断されているのである。

ヒュームは因果性のみが「経験によって知らされる関係」(ヒューム、39 ページ)としているが、厳密に言えば、哲学的“関係”とは、どれも「経験として現れる関係」、経験そのものとして与えられている判断なのである(ヒュームは「経験」の位置づけを見誤っているが、それについては別稿で詳細に論じる予定)。

類似・同一・相違、それらすべて“端的に”現れる経験なのである。

II. 「同じ」ことを疑うのであれば「違う」ことも疑わなければならない

ヒュームは同一性も「知覚」と呼んだはずである。しかし、

すべて印象は内的な、消え去る存在であり、そのようなものとして現れるのであるから、印象が別個の持続的な存在であるという思いは、印象のある性質と想像の緒性質との共同した作用から起こるのに違いない。(ヒューム、97 ページ)

・・・という矛盾する問いを立てているのである。ここで**端的に「同じ」である知覚を無視し、「変化した」「消え去った」知覚のみを強調してしまった**のである。「万物は流

転する」といった一般的哲学常識に流されてしまったように思えるのだが・・・

われわれが持続的存在を帰属させる対象にはどれにも特異な恒常性があり、この恒常性がこれらの対象を、知覚に依存して存在する印象から区別している。(ヒューム、98 ページ)

・・・とあるが、それは単なる「知覚」(つまり印象・観念)のはずではなかつたのだろうか？ なぜ急に変化・相違のみが印象であって、同一性は「特異」なものとなつてしまつたのだろうか？ ヒュームの議論には一貫性がない、自らの説明を覆してしまつてゐるのだ。

実際どうなのか、具体的経験を振り返つて(あるいは試して)見れば良い。そこにリンゴがあつて、目をつぶつたり別室に移つたりしても、目を開けたり戻つたりすれば、またそこにリンゴがある。それを「同じリンゴ」と“端的”に思うだけであつて、そこに何の“違い”・“変化”があるだろうか？

もちろんその景色に何らかの変化がみられる場合もあるかもしれない(ないかもしれない)。しかしそれでも、先ほど見た「リンゴ」と今の「リンゴ」の知覚が違ふものであると証明などできるのであろうか？ 証明できない「相違」「変化」を“印象”とし、実際に感じた「同一性」「恒常性」を“完全なものではない”(ヒューム、98 ページ)と言ひ切る根拠はいつたい何なのだろうか？

また、ずっと目の前のリンゴを見ているとき、そこに心の変化や聞こえてくる音の変化があつたとしても、そのリンゴ自体に「変化」が見られなければ、それは“端的な”恒常性と言えないであらうか？ 少なくとも、その間、そのリンゴに関する知覚は消え去ることはない。何か音楽が浮かんで来たり、リンゴにまつわる過去の経験を思い出したりしたとしても、リンゴはそこに変わらずある。

恒常的で不変な印象などどこにもない。快や苦、悲しみや喜び、いろいろな情念や感覚がつぎつぎに継起し、けつしてすべてが同時に存在することはない。(109 ページ)

・・・本当であらうか？ 印象が次々に現われることもあるし、変化しない時もある。ある絵を見ているときに様々な情念が現れて来るかもしれないが、そのときに目の前の絵が消えてなくなるわけではない。繰り返しになるが「万物は流転する」という哲学的常識のようなものが、実際の具体的経験を見誤らせているように感じられるのである。

ヒュームの問題点は、同一性・恒常性は懷疑するのに、変化・差異は懷疑しないところである。知覚的经验として現れる「同一性」の根拠を問うのであれば、同様に知覚的经验として現れる「変化」「相違」も同様に根拠を問う必要があるのだ。

例えば、学校で仕様が指定されている手さげ袋を買って、それに自分の名前を書いておいたとする。次の日、学校で別の生徒から「それは私のものじゃないか？」と疑われても、そこに自分の名前を確認できればとりあえず私のものである（その生徒のものではない）という証拠になる（疑えばさらにいろいろあるだろうが）。昨日に名前を記入した手さげ袋と、現在そこにある手さげ袋に同一性を確信し、そしてそれに対する懐疑を晴らす根拠を示したのである。

反対のことも言える。例えばそこに掛かっている手さげ袋があって、別の生徒から「それはあなたのものじゃないのか」と問われても、自分の手さげ袋は別のところにある、それは自分のものではないと思うとき、実際にその手さげ袋を確かめ、それに自分の名前が書いてないこと（あるいは他の人の名前が書いてあること）を確認して、それは自分のものとは「違う」と証明できるであろう。

少々無理やりな状況設定であったかもしれないが・・・ここで私が言いたいことは、「同一性」が疑われたとき、過去の経験との因果的整合性によりその同一性が根拠づけられるのであれば、「相違」を証明したい場合においても同様に“整合性”が求められる、ということなのである。（後で触れるが、ここでいう整合性とはヒュームの言う「整合性」とは少しニュアンスが異なるが・・・因果的経験則であることに変わりはない）

同一性、相違・変化、ともに同じように“端的”な知覚であり、それらの根拠を示そうとすれば、過去の経験との因果関係により（それをヒュームは整合性と呼んでいる）証明するしかない、ということなのである。

ヒュームは次のように説明しているが・・・

印象の存在がこのように中断することは、印象の完全な同一性に反することであり、初めの印象は消滅したもの、第二の印象は新たに作られたものとわれわれに考えさせるので、われわれはいくらかとまどいを感じ、一種の矛盾に巻き込まれる。そこで、この困難からのがれるために、できるだけ中断を蔽い隠そうとして、というよりすっかり取り除こうとして、これらの中断された知覚は、われわれには気づかれぬ真の存在によって結合されているのだ、と想定するのである。（ヒューム、103 ページ）

・・・印象が中断したからといって、また現れた印象が「違う」ものであると断言することなどできないのである。ヒュームは「新たに作られたもの」という思い込みをまず疑うべきであったのだ。「同じ」であることを疑うのであれば、同様に「違う」ことも疑うべきなのだ。この点においてヒュームの懐疑は徹底していない。

われわれの知覚が切れ切れで中断しており、いかに似かよっていても、やはり互いに異なっていることが承認されているとしよう。（ヒューム、105 ページ）

・・・という見解自体に問題があったのだ。「互いに異なっていること」が根拠づけられうることもあるし、根拠づけられないこともある。どう見ても同じだ、と思うのであればそれは同じなのであって、それが「異なる」ことは何ら証明されてはいないのだ。

そして本章の最後に付け加えておくが・・・「同じだ」「違う」と思うのは“端的”にそう思うのであって、あくまでそれが疑われたとき、根拠を問われたときに、あるいは同じか違うか迷った時に、初めて整合性つまり因果的経験則というものが問題となってくるのである。それら因果的説明はあくまで後付け的なものであって（因果律はアプリアリではない）、その因果的説明は絶対的なものではないし、そうってしまった「理由」「原因」というものなど本当のところは分からない場合があるかもしれないのである。

Ⅲ. 「同じ」にもいろいろある

われわれの主な仕事は、変化せぬこと、中断せぬことが認められもしないのに同一性が帰せられるようなすべての対象が、関係し合う対象の継起からなるものであることを証明することでなければならない。（ヒューム、111～112 ページ）

・・・ヒュームはいくつかの事例を挙げてこのことを説明しようとする。

各部分が近接し結合しているある物質の塊^{かたまり}が目の前におかれていると仮定しよう、もしすべての部分が中断もせず変化もせず、同じままであり続けるなら、たとえば全体もしくはいずれかの部分にどのような運動、場所の変化が認められたにしても、明らかにわれわれはこの塊に完全な同一性を帰属させるに違いない。ところが、あるきわめて小さい、取るに足らぬほどの部分はその塊に付け加えられるか、もしくは取り除かれたと仮定すると、厳密に言うと、たしかにこれは全体の同一性をすっかりこわしてしまうのであるが、しかし、われわれはそれほど正確にはほとんど考えないので、見いだされる変化がごく些細な場合には、ためらわずに物質の塊は同じだと明言するだろう。というのは、変化する以前の対象から変化したあとの対象への思考の移行はきわめてなめらかに、たやすく行われるので、移行はほとんど気づかれず、したがって、同じ対象を眺めつづけているだけのことだと想像しがちなのである。（ヒューム、112 ページ）

・・・「もしすべての部分が中断もせず変化もせず、同じままであり続ける」場合もあ

ることを肯定しているようにも読めるのだが・・・実際、変化を認められずそのままそこにあり続ける物体、というものもあちこちにあると思うのだが。昨日机に置いた石を次の日に見たとしても「すべての部分が中断もせず変化もせず、同じままである続ける」と思う他はないように思えるのだが。

つまりこれが一つの「同一性」である。

次にヒュームが説明している、部分が少しだけ変化してしまった場合である。これについても“些細な”変化というからには、その他の部分においては変化が見られなかった、ということである。ヒュームは知覚の一部のみを強調しているだけなのである。これは「混同、誤り」（ヒューム、111 ページ）なのではなく、「同一性」の一種なのである。

一部の変化が量的なものなのか、質的なものなのかは時と場合によって違ってくるかもしれない。しかしその変化・相違がある程度違って、ある程度変化しない部分が保たれていれば「同じ」と見なされる。その変化が観察者によって気づかれる場合もあれば気づかれない場合もある。

あるいはヒュームのいう「整合性」も関与してくるかもしれない。たとえば、机の上に木片が置きっぱなしになっていたが、昨日友人がその木をノミで削っていたとか・・・そういった情報を聞いていれば、その木片の形状が少しくらい変化していても、それが同じ木片であったのだと判断することができよう。以下のようにヒュームは説明している。

物体はしばしばその位置と性質を変え、ときには、しばらく見えなかったあとで、つまり知覚が中断したあとで、それと見分けられぬようになることもあるのである。しかし、この場合でも、物体はこのように変化しても整合性を保っていること、すなわち、変化する前と後の状態は互いに規則的に依存し合っていることが認められる。そして、このことが一種の因果性による推論のもとをなして、物体の持続的な存在という所信を生むのである。（ヒューム、98 ページ）

ヒュームは、さらに「各部門相互の連関を作り出すこと、つまり、ある共通目的、共通な意図への結集を作り出すこと」（ヒューム、113 ページ）による同一性として船を事例に挙げている。

たとえば、船のかなりの部分が何度も修理したために変化していても、船はなお同じものだと考えられる。材料が違って、それは船に同一性を帰する妨げにはならないのである。各部分が協力して働く共通目的は、部分がどんなに変わっても同じであり、この共通目的が想像を物体のある状態から他の状態へたやすく移れるようにするわけである。（ヒューム、113 ページ）

・・・これもやはり同一性の一形態であると言うべきであろう。船大工も船の持ち主も船員も、修理のたびに材料が別のものに取り換えられていることくらい知らないはずはない。そんなことは知っている上で、「同じ船だ」と考えているのである。別に混同したり誤ったりしているわけではない。

「同じ」にもいろいろな種類があるというわけなのだ。

植物にしても、その成長プロセスを私たちは知っている。ある時点においてその植物を引っこ抜いてしまうと、もうそこには実のなる木が現れることはないのである。形は変われど「同じ苗・木」とであると判断されている。これもヒュームの言う「整合性」、つまり因果的経験則によるものである。

また毎日のように観察している生物、植物であるならば、日々の変化など見逃してしまうであろう。後になってその変化に気づくこともある。あれ、気が付かないうちに〇〇ちゃん大きくなったね、とかそういうような感じである。ヒュームは「共通目的への各部分への共感」「因果的相互関係」（ヒューム、113 ページ）というものを動植物の同一性の原因のように説明しているが、それだけで説明できるようなものでもないであろう。

これらのことから、ヒュームの論点がずれてしまっていることがわかるであろう。「**変化せぬこと、中断せぬことが認められもしないのに同一性が帰せられるようなすべての対象が、関係し合う対象の継起からなるものであることを証明**」（ヒューム、111～112 ページ）したところで、それは「同一性」にはさまざまな種類があることを説明するだけであって、「**すべての部分が中断もせず変化もせず、同じままであり続ける**」（ヒューム、112 ページ）場合もあることを否定するものではないからである。

そして、最後に繰り返すが、同一性の「理由」というものは後付けの因果的説明であるにすぎず、私たちはただ端的に“同じだ”“違う”と判断しているだけなのである。

IV. 「人格の同一性」は記憶による

最後に人格の同一性に関して少し述べておこうと思う。

第一篇における「同一性」に関する議論は、あくまで他者から見たその人の「同一性」について説明するものである。あるいは私ではない佐藤さん、鈴木さんの「同一性」について説明するものである。ヒュームは「**自分自身についていづく関心に関する人格の同一性**」（ヒューム、110 ページ）については、第一篇では論じていない（実質的には少し触れてはいるが）。ただ、「**思考や想像に関する人格の同一性**」（ヒューム、110 ページ）という表現はいま一つ理解できない。ただ自分自身に関する同一性と、他者の同一

性について区分すれば良いだけではなかろうか？ 他者は思考や想像のみでない。他者は実際に印象として現れるものだからである。・・・おそらくであるが、ヒュームは主観的ではなく客観的に考えた上での人間というものの同一性、と考えていたのではなかろうか。

具体的に考察してみよう・・・しばしば会おう人であれば、日々の変化はほとんどないから同じ人であるという認識に違和感はないであろう。変化というものは後から気づくものである。こういった同一性に関しては先に述べた。

私たちは人が子どもから大人になるという事実を因果的知識として知っている。しかし子どもの時から長らく会えず、大人になってから再会した時、同じ人であると分かる場合と分からない場合がある。分かる場合は、その容姿などに同じ、あるいは類似する部分というものを見つけたからであろうし、分からない場合は同じあるいは類似する部分を見つけられなかったからであろう（因果的に考えれば）。あるいは単に忘れてしまっていた、ということの方が多いかもかもしれない。

ヒュームは「彼の心、つまり思考する原理を構成する知覚の継起を観察できると仮定しよう」（ヒューム、116 ページ）とするが、これはナンセンスだ。他人の心に何が写っているか見ることなどできようがない。

しかし「記憶」という着眼点について異論はない。長らく会っていない人と再会して、その人かどうか確認しようとするれば、会話の中で昔の出来事の記憶における共通点を見出そうとするに違いない。その人と遊んだ記憶、出かけた記憶、学校での記憶・・・一致すれば「ああ、あの A さんだ」という結論になるであろう。もちろん疑えばいくらでも疑う余地はある。私の中の A さんの過去の姿と今の姿に共通点を全く見いだせなければ、あるいは過去の A さんと今の A さんの立ち振る舞いがあまりにも違っていれば、本当に同一人物か疑わしく思うかもしれない。

いずれにせよ「記憶を人格の同一性の源と見なすことができよう」（ヒューム、117 ページ）というのは、確かにそうである。私自身が持つ A さんに関する記憶、そして A さんが言葉で表現する過去の記憶、それがある程度私自身の記憶と合致していれば（記憶だからすべて合致するとは限らないが）A さんその人であると判断できよう。

V. 「自己」「人格」という“実体”はない

「自分自身についていづく関心に関する人格の同一性」（ヒューム、110 ページ）についても少し考察してみよう。

私の場合は過去の記憶を心像として呼び起こせる。それらのイメージやら自分自身や他の人が喋った言葉やら、様々な出来事を記憶（つまり時間と場所・空間と結び付けられるイメージ）として呼び起こすことができるかどうか、それが人格の同一性、ということになるであろう。

「人格」「自己」という“実体”があるのではない。ただあるのは記憶として呼び起こせるイメージや言葉だけなのである。

自己のいかなる観念もわれわれは持っていない（ヒューム、108 ページ）

個々の知覚とは別個な心なるものについてはわれわれはなにも知らない（ヒューム、135 ページ）

・・・というヒュームの見解はもっともなものである。実際「自己そのもの」を探そうとしても、どこにも見つかることはない、具体的な経験、知覚的经验として現れることなどないからである。「心」についても同様である。

もちろん一人の生物として存在する人間がいて、その人間が様々な知覚を受け取っているという事実は（因果的に）認められる。しかし、そこに「自己」（観念的自己）というものなどどこにも見つけることはできないのである。

私自身と呼ぶものに最も奥深く入り込んでも、私が出会うのは、いつも、熱さや冷たさ、明るさや暗さ、愛や憎しみ、快や苦といった、ある特殊な知覚である。どんなときでも、知覚なしに私自身をとらえることはけっしてできず、また、知覚以外のなにかに気づくことはけっしてあり得ない。（ヒューム、109 ページ）

・・・確かに、経験として現れるのは具体的な知覚的经验（実際には言葉も含むのだが）でしかない。

ただ「私自身をとらえる」とは具体的にどういうことなのであるだろうか？ そんなことが出来るのであるだろうか？ とらえようとしても、現れるのはどこまでも具体的知覚（や言葉）、「私自身」というものは（あるいは観念的な自己は）どこにもないのである。「知覚の束」「集合」（ヒューム、110 ページ）というものはどこにあるだろうか？ 知覚はあるが「束」「集合」というものはどこにあるのだろうか？

繰り返すが、もちろん身体を持ち知覚を受け取っている（と因果的に考えられる）「私」というものは認められる。「私」と呼ぶことができる身体を持つ生物（人間）というものは存在している。しかしそこに“同一性”を持つ「人格」「自己」というものなどどこにあるだろうか？

自己・人格が「同一性」を有しているのではない。記憶があるから人格が同一であると判断されるのである。そこにあるのは（其他的経験として現れるのは）あくまで記憶としての出来事のイメージ、様々な知覚でしかない。人格・自己が同一であるから記憶が成立するのではなく、それらの記憶があって、初めて人格・自己が同一であると判断されているのである。「一生を通じて変わらずに同じままでなければならない」（ヒューム、109 ページ）「自己」など、どこにもないのである。それは「恒常的で不変な印象などどこにもない」（ヒューム、109 ページ）からではなく、単に「自己そのもの」の印象がどこにもないからである。

記憶というものが具体的イメージや言葉として現れる事実さえあれば、それが人格の同一性なのであって、「結合の原理」（ヒューム、135 ページ）を解明する必要などどこにもないのである。そんな“原理”など関係なくとも、ただ昭和50年の何月に何々をしたとか、平成3年に沖縄に旅行したとか、そういった具体的な記憶というものが現れること、それ自体が人格の同一性の証なのである。

もちろん、その時の記憶があいまいで、ひょっとして思い違いではないか・・・本当はそんな経験していないのではないか、という疑念が生じることもある。勘違いもある。ただ、それでも記憶のある範囲において、自らの同一性というものが認められうるのである。

<追記>

ヒューム『人性論』分析：記憶と想像の違いとは？

http://miya.aki.gs/miya/miya_report27.pdf

（記憶と想像との違い）

・・・で詳細に論じているが、記憶が想像との違いとは、時間や場所・空間と関連づけることができるかどうか、ということであって、「知覚の勢いと生氣」は記憶と想像とを区別する基準にはなりえないのである。